オンラインによる医療と福祉の多職種連携教育を通した長崎純心大学における「地域包括支援実習」の成果に関する研究
―ソーシャルワークによる支援に焦点を当てて―

吉　田　麻　衣・潮　谷　有　二・奥　村　あすか
足　立　耕　平・永　田　康　浩

Research on the Results of “Practicum of Community Comprehensive Care” at Nagasaki Junshin Catholic University through Online Interprofessional Education in Medical Care and Welfare
―Focus on Social Work Practice―

Mai YOSHIDA, Yuji SHIOTANI, Asuka OKUMURA
Kouhei ADACHI, Yasuhiro NAGATA

要　約

本研究では、これまでの研究結果を踏まえて、令和２年度及び令和３年度における「地域包括支援実習」でのオンラインによるワークショップをする際に長崎純心大学人文学部地域包括支援学科２年生は、ソーシャルワークの視点からの学びがどの程度あったのか、そして学生の所属するコースによってソーシャルワークの視点からの学びに違いがあるかを分析し、把握することを目的とした。

まず、コース別の差異を明らかにするために、横断分析としてKruskal-Wallis検定を行った結果、令和２年度及び令和３年度の全ての項目において統計的に有意な差は見られなかった。このことから、「地域包括支援実習」のオンラインワークショップにおいては、どのコースに所属している学生であってもソーシャルワークの視点についての理解や視点を用いた検討がどの程度できたかという学びへの評価に違いは見られないことが考えられた。

次に、自己評価項目の時系列変化について明らかにするために、縦断分析としてFriedman検定による分析を行った結果、令和２年度では、２年生において12項目に、ソーシャルワークコースについては７項目に、心理学・カウンセリングコースについては３項目に統計的に有意な変化が見られ、それらの項目は、１日目に比して２日目の得点が高い方に分布していることが明らかになった。そして、令和３年度では、２年生において９項目に、ソーシャルワークコースについては７項目に、心理学・カウンセリングコースについては３項目に統計的に有意な変化が見られ、それらの項目は、１日目に比して２日目の得点が高い方に分布していることが明らかになった。これらのことから、オンラインであっても２日間のワークショップは回数を重ねることによって、ソーシャルワークの観点から事例検討に関する一定の教育効果が生じているということを推察することができた。

キーワード：ソーシャルワーク、多職種連携教育、福祉人材、地域包括ケア

Ⅰ．研究の背景と目的

長崎純心大学（以下、「本学」という。）と長崎大学医学部では平成25年度より大学や地域を基盤とする医療と福祉の専門人材の養成に資する多職種連携教育を実施しており、当該事業の一つである「地域包括支援論Ｂ」において開講されている両大学による共修授業は、平成27（2015）年度から継続的に取り組んでいる。さらに、令和元（2019）年度より本学人文学部地域包括支援学科２年生を対象に実習科目として「地域包括支援実習」を開設し、その一部として長崎県五島市で実施される「長崎地域医療セミナー in GOTO（以下、五島セミナーという。）」に参加している。

なお、「地域包括支援実習」の科目設立の経緯や目的、セミナーのプログラムの詳細については奥村・潮谷ら（2019）を参照されたい。五島セミナーでは、長崎大学医学科及び本学地域包括支援学科の学生が企画・運営を行う学生実行委員を組織し、五島セミナーの実施の成果については学生実行委員を中心にプライマリケア学会や全国シンポジウムにて報告されている（戸口・内田ら 2014、出雲・加藤ら 2014、戸口・内田ら 2015、出雲・加藤ら 2015、梅本・鈴田ら 2015、梅本・鈴田ら 2016、山口・駒走ら 2019、本林・山中ら 2020）。例えば、山口・駒走ら（2019）は、医学系学生と福祉系学生とがワークショップを通して多職種連携を擬似体験し、互いを尊重して連携することの重要性を学んだということを述べている。

ところで、「地域包括支援実習」及び「地域包括支援論Ｂ」において開講されている共修授業では、多職種連携教育における自己評価項目によって学びを評価し、その結果について報告してきたが（潮谷・永田ら（2017）、潮谷・梁瀬ら（2020）等）、厚生労働省（2018）が「ソーシャルワーク専門職である社会福祉士に求められる役割等について」において指摘したように地域共生社会の実現のためにソーシャルワークの機能の発揮に資する教育が社会福祉士養成課程において期待されている観点から、令和元（2019）年度からは、従来の自己評価項目に加えてソーシャルワークの視点からの学びについても評価を行った。

それらの研究成果については、吉田・潮谷ら（2020）により「地域包括支援実習」の一部である五島セミナーにおいて、本学学生が事例検討する際にソーシャルワークの視点からの学びがどの程度あったのかを把握し、学びの成果について検討するために13項目の測定項目による自己評価尺度を作成し、分析結果を報告したものが存在する。作成した自己評価尺度の得点に対して時系列変化をみるため Friedman 検定による分析を行った結果、「多職種連携における専門職の役割への理解」や「フォーマル・インフォーマルな社会資源の活用」、「理論・モデルに基づいた検討」の自己評価尺度の得点において、１日目に比して３日目の自己評価尺度得点の中央値が統計的に有意なプラスの変化が生じていたことが報告された。

さらに、刊行されていないが、本学の潮谷研究室に所属していた鍋内（2021）は、令和元（2019）年度の「地域包括支援論Ｂ」の共修授業における事例検討を通したソーシャルワークの視点からの学びの成果について記述的に明らかにした。本学地域包括支援学科の３年生（以下、「包支３年」という。）、本学地域包括支援学科４年生（以下、「包支４年」という。）の学年別に Friedman 検定を行った結果、包支３年は統計的に有意なプラスの変化が生じており、共修授業前の事前教育

が有効であること、包支４年は統計的に有意なプラスの変化が生じていないことから、複数年度受講する学生については教育上の課題があることを示唆した。

そして、吉田・潮谷ら（2022）による令和元（2019）年度の「地域包括支援論Ｂ」において、「地域包括支援実習」に用いた自己評価項目をもとに本学学生が共修授業における事例検討する際にソーシャルワークの視点からの学びがどの程度あったのかを把握するために共修授業ソーシャルワーク自己評価尺度の開発並びに構成概念妥当性と信頼性の検討、各尺度得点における記述統計量の算出及び時系列変化の分析を通して成果について報告したものがある。共分散構造分析の結果、構成概念妥当性と信頼性を兼備している８つの自己評価項目を含む３つの因子によって構成される尺度を作成した。当該尺度得点に対して Friedman 検定による分析を行った結果、本学地域包括支援学科３年生及び４年生については、多職種連携の視点に関する尺度得点、社会資源の活用に関する尺度得点において統計的に有意なプラスの変化が見られ、包支３年については、多職種連携の視点に関する尺度得点、社会資源の活用に関する尺度得点、理論に基づいた検討に関する尺度得点において統計的に有意なプラスの変化が見られ、包支４年については、全ての尺度得点において統計的に有意な変化が見られなかったことを明らかにした。

そのような状況の中、令和２（2020）年度と令和３（2021）年度はコロナウイルス感染症の拡大を受け、両大学の共修授業や五島セミナーはオンラインやハイブリッドでの実施となり、特に五島セミナーでは、コロナウイルス感染症拡大を防止する観点から講義はオンラインと対面のハイブリッドで実施し、ワークショップについては、オンラインにて実施した。令和２（2020）年度の五島セミナーの実施については、プライマリケア学会にて本林・山中ら（2020）によって、五島セミナーをハイブリッドセミナーにすることで、医療と福祉の連携や地域医療の興味関心について一定の成果が得られたこと、初対面の学生同士でも円滑なワークショップを行うことができたこと、コミュニケーションをより構築しやすいようなオンラインの運用方法を今後検討していくことが重要であることが報告された。

また、本学では社会のさまざまな課題に対応するために、地域包括ケアシステムを包含し、誰もが支え・支えられる社会の実現を目指す全世代・全対象型の「地域包括支援システム」の構築が求められている背景から、本学人文学部地域包括支援学科では、令和元（2019）年度の入学生より人間心理学科と統合し、「ソーシャルワークコース」、「地域包括ケアコース」、「心理学・カウンセリングコース」を設定し、福祉的支援や心理学の視点から、さまざまな支援の方法について理論的かつ実践的に学んでいくことを目指している。従来は、ソーシャルワークコースや地域包括ケアコースに所属する社会福祉士や介護福祉士の資格取得を志す学生達が中心に五島セミナーに参加をしていたが、令和２年度の参加者より、心理学・カウンセリングコースの学生も一定数参加をするようになった。しかし、それらのコースの違いによる学生のソーシャルワークの視点に関する学びの評価については未だ報告されていない。

そこで、本研究では、これらの研究結果を踏まえて、令和２年度及び令和３年度における「地域包括支援実習」でのオンラインによるワークショップをする際に本学学生のソーシャルワークの視点からの学びがどの程度あったのか、そして、学生の所属するコースによってソーシャルワークの視点からの学びに違いがあるかを分析し、把握することを目的とした。

Ⅱ．方法

1．調査対象者及び調査方法

調査対象者は、令和２年度に行われた地域包括支援実習の一部である五島セミナーに参加した本学人文学部地域包括支援学科２年生（以下､「２年生」という。）16名（そのうちソーシャルワークコースが11名、地域包括ケアコースが１名、心理学・カウンセリングコースが４名であった。）、令和３年度に行われた地域包括支援実習の一部である五島セミナーに参加した２年生19名（そのうちソーシャルワークコースが13名、心理学・カウンセリングコースが６名であった。）であり、調査方法は、それぞれ両年ともにワークショップ終了後にGoogleフォームを用いた自計式調査にて測定を行った。

調査時期は、令和２年度においては、令和２年（2020）年８月22日（土）に実施した１日目五島セミナーの終了後（以下、「令和２年度１日目」という）、同年８月23日（日）に実施した２日目五島セミナーの終了後（以下、「令和２年度２日目」という）であり、令和３年度においては、令和３（2021）年８月22日（日）に実施した１日目五島セミナーの終了後（以下、「令和３年度１日目」という）、同年８月23日（月）に実施した２日目五島セミナーの終了後（以下、「令和３年度２日目」という）であり、回収数（回収率）は、令和２年度が16件（100％）、令和３年度が19件（100％）であった。

なお、令和２年度における地域包括ケアコースの学生１名については、個人が特定できる観点から今回の分析からは除外し、それ以外の15名を分析対象者としたことをお断りしておく。

2．調査に伴う倫理的配慮

調査に伴う倫理的配慮としては、調査時に Google フォームにて調査によって得られた回答の内容は、授業評価に影響することはない旨を示し、調査実施に対する承諾を得た上で調査を実施をしたことに加え、分析の過程において、個人が特定されることがないように長崎純心大学医療･福祉連携センターで匿名化し、統計処理を行い、個人のプライバシーが外部に漏洩することがないように実施した。

3．調査項目及び測定方法

調査項目については、吉田・潮谷ら（2022）及び吉田・潮谷ら（2020）が使用したソーシャルワークの視点に関する自己評価の測定項目を参考に修正したオンラインによるワークショップにおけるソーシャルワークの視点に関する自己評価の測定項目を用いた（表Ⅱ－１）。

具体的には、ｑ１はワークショップへの意欲に関する項目、ｑ２とｑ３は多職種連携における専門職の役割への理解に関する項目、ｑ４とｑ５とq14は多職種連携の視点に関する項目、ｑ６とｑ７はフォーマル･インフォーマルな社会資源の活用に関する項目､ｑ８とｑ９とq10はミクロシステム･メゾシステム・マクロシステムのシステムモデルに基づいた検討に関する項目、q11とq12、q13はバイオ・サイコ・ソーシャル（bio-psycho-social、以下「BPS」という。）モデルやエンパワメントモデル、ストレングスモデル等の理論に基づいた検討に関する項目を作成した。

なお、２日間にわたるワークショップの調査時期における自己評価項目の変数に対する表記については、例えば、q１の場合、１日目自己評価項目はq１_１とし、２日目自己評価項目はq１_２とした。

表Ⅱ-１　測定項目及び測定方法

ワークショップ自己評価項目	測定方法
q１　あなたは、ワークショップに対して、どの程度意欲的に取り組みましたか。 q２　あなたは、ワークショップを通して医療関係の専門職の役割について、どの程度理解できましたか。 q３　あなたは、ワークショップを通して福祉関係の専門職の役割について、どの程度理解できましたか。 q４　あなたは、ワークショップを通して他学科の学生と一緒にどの程度事例について医療の視点から検討できたと思いますか。 q５　あなたは、ワークショップを通して他学科の学生と一緒にどの程度事例について福祉の視点から検討できたと思いますか。 q６　あなたは、ワークショップを通してフォーマルな社会資源をどの程度活用することができたと思いますか。 q７　あなたは、ワークショップを通してインフォーマルな社会資源をどの程度活用することができたと思いますか。 q８　あなたは、ワークショップを通してミクロレベル（個別支援レベル）での検討が、どの程度できたと思いますか。 q９　あなたは、ワークショップを通してメゾレベル（小地域や組織レベル）での検討が、どの程度できたと思いますか。 q10　あなたは、ワークショップを通してマクロレベル（法制度や政策、行財政レベル）での検討が、どの程度できたと思いますか。 q11　あなたは、ワークショップを通してbio-psycho-social（バイオ・サイコ・ソーシャル）モデルに基づいての検討が、どの程度できたと思いますか。 q12　あなたは、ワークショップを通してエンパワメントモデルに基づいての検討が、どの程度できたと思いますか。 q13　あなたは、ワークショップを通してストレングスモデルに基づいての検討が、どの程度できたと思いますか。 q14　あなたは、ワークショップを通して多職種連携を想定した検討が、どの程度できたと思いますか。	q１について、「非常に意欲的に取り組んだ」に６点、「意欲的に取り組んだ」に５点、「やや意欲的に取り組んだ」に４点、「あまり意欲的に取り組まなかった」に３点、「意欲的に取り組まなかった」に２点、「全く意欲的に取り組まなかった」に１点を配点し、測定した。 q２、q３について、「非常に理解できた」に６点、「理解できた」に５点、「やや理解できた」に４点、「あまり理解できなかった」に３点、「理解できなかった」に２点、「全く理解できなかった」に１点を配点し、測定した。 q４、q５、q８、q９、q10、q11、q12、q13、q14について、「非常に検討できた」に６点、「検討できた」に５点、「やや検討できた」に４点、「あまり検討することができなかった」に３点、「検討することができなかった」に２点、「全く検討することができなかった」に１点を配点し、測定した。 q６、q７について、「非常に活用することができた」に６点、「活用することができた」に５点、「やや活用することができた」に４点、「あまり活用することができなかった」に３点、「活用することができなかった」に２点、「全く活用することができなかった」に１点を配点し、測定した。

４．分析方法

分析方法は、自己評価項目における記述統計量を年度別、評価時期別、コース別に算出するとともにShapiro-Wilkの正規性の検定を行った。次に、横断分析として、コースによる差異をみるために、乱数の種を123に固定し、ノンパラメトリック検定のKruskal-Wallisの正確確率検定を行った。さらに、縦断分析として、２日間にわたるワークショップの自己評価項目における変化を見るために、ノンパラメトリック検定のFriedman検定を行った。

なお、本研究において、分析対象者が令和２年度は15名、令和３年度は19名と数が少ないことに加え、Shapiro-Wilkの正規性の検定の結果、いくつかの自己評価項目において正規性が担保されていることが明らかになった変数もあったが、正規性が棄却される変数も存在したため、ノンパラメトリック検定としてFriedman検定やKruskal-Wallisの正確確率検定を適用したことを付記しておく。

また、上述した分析には、Rver.4.2.2及びRのパッケージであるRcmdrMisc、kSamples、Rcommnder、RcmdrPlugin. EZR（KANDA、2013）を使用した。

なお、文中及び表内に使用する語句の略称については、n.s. はnot significantの略称であり、pは、probabilityの略称であることを付記しておく。

Ⅲ．結果

1．令和２年度の自己評価項目における記述統計量及び Friedman 検定、Kruskal-Wallis 検定の分析結果

（１）令和２年度のワークショップへの意欲に関する項目

q1_1、q1_2についてShapiro-Wilk正規性の検定を行った結果、すべての項目の正規性が棄却されたため、ノンパラメトリック検定を行った（表Ⅲ－1)。次に、q1_1、q1_2のコースによる差異についてKruskal-Wallis検定を行った結果、２つの変数においてコース間に統計的に有意な差は見られなかった。

また、２年生及び各コースによるq1_1とq1_2の時系列変化についてFriedman検定を行った結果、２年生（p＝.025）及びソーシャルワークコース（p＝.025）においては、統計的に有意なプラスの変化が見られ、q1_1に比してq1_2の中央値が大きいことが明らかになった。なお、心理学・カウンセリングコースでは、統計的に有意なプラスの変化が見られなかった。

表Ⅲ－1　令和２年度のワークショップへの意欲に関する項目の分析結果

	q1_1									q1_2									
	mean	s.d.	IQR	0%	25%	50%	75%	100%	Shapiro-Wilk normality test	mean	s.d.	IQR	0%	25%	50%	75%	100%	Shapiro-Wilk normality test	Friedman検定
２年生（n＝15）	5.13	0.74	1.00	4.00	5.00	5.00	6.00	6.00	.006	5.47	0.64	1.00	4.00	5.00	6.00	6.00	6.00	p<.001	.025
ソーシャルワークコース（n＝11）	5.09	0.70	0.50	4.00	5.00	5.00	5.50	6.00	—	5.55	0.52	1.00	5.00	5.00	6.00	6.00	6.00	—	.025
心理学・カウンセリングコース（n＝４）	5.25	0.96	1.25	4.00	4.75	5.50	6.00	6.00	—	5.25	0.96	1.25	4.00	4.75	5.50	6.00	6.00	—	n.s.
Kruskal-Wallis test						n.s.									n.s.				

（２）令和２年度の多職種連携における専門職の役割への理解に関する項目

q2_1、q2_2、q3_1、q3_2についてShapiro-Wilk正規性の検定を行った結果、すべての項目の正規性が棄却されたため、ノンパラメトリック検定を行った（表Ⅲ－２)。次に、q2_1、q2_2、q3_1、q3_2のコースによる差異についてKruskal-Wallis検定を行った結果、４つの変数においてコース間に統計的に有意な差は見られなかった。

２年生及び各コースによるq2_1とq2_2、q3_1とq3_2の時系列変化についてFriedman検定を行った結果、２年生では、q2_1とq2_2（p＝.007)、q3_1とq3_2（p＝.008）において、ソーシャルワークコースでは、q3_1とq3_2（p＝.046）において、心理学・カウンセリングコースでは、q2_1とq2_2（p＝.046）において、統計的に有意なプラスの変化が見られた。

表Ⅲ－２　令和２年度の多職種連携における専門職の役割への理解に関する項目の分析結果

	q2_1									q2_2									
	mean	s.d.	IQR	0%	25%	50%	75%	100%	Shapiro-Wilk normality test	mean	s.d.	IQR	0%	25%	50%	75%	100%	Shapiro-Wilk normality test	Friedman検定
２年生（n＝15）	4.27	0.80	1.00	3.00	4.00	4.00	5.00	5.00	.002	4.93	0.70	0.50	4.00	4.50	5.00	5.00	6.00	.006	.007
ソーシャルワークコース（n＝11）	4.36	0.81	1.00	3.00	4.00	5.00	5.00	5.00	—	4.82	0.60	0.50	4.00	4.50	5.00	5.00	6.00	—	n.s.
心理学・カウンセリングコース（n＝４）	4.00	0.82	0.50	3.00	3.75	4.00	4.25	5.00	—	5.25	0.96	1.25	4.00	4.75	5.50	6.00	6.00	—	.046
Kruskal-Wallis test						n.s.									n.s.				
	q3_1									q3_2									
	mean	s.d.	IQR	0%	25%	50%	75%	100%	Shapiro-Wilk normality test	mean	s.d.	IQR	0%	25%	50%	75%	100%	Shapiro-Wilk normality test	Friedman検定
２年生（n＝15）	4.53	0.52	1.00	4.00	4.00	5.00	5.00	5.00	p<.001	5.00	0.38	0.00	4.00	5.00	5.00	5.00	6.00	p<.001	.008
ソーシャルワークコース（n＝11）	4.64	0.50	1.00	4.00	4.00	5.00	5.00	5.00	—	5.00	0.45	0.00	4.00	5.00	5.00	5.00	6.00	—	.046
心理学・カウンセリングコース（n＝４）	4.25	0.50	0.25	4.00	4.00	4.00	4.25	5.00	—	5.00	0.00	0.00	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	—	n.s.
Kruskal-Wallis test						n.s.									n.s.				

（３）令和２年度の多職種連携の視点に関する項目

q4_1、q4_2、q5_1、q5_2、q14_1、q14_2についてShapiro-Wilk正規性の検定を行った結果、すべての項目の正規性が棄却されたため、ノンパラメトリック検定を行った（表Ⅲ－3）。次に、q4_1、q4_2、q5_1、q5_2、q14_1、q14_2のコースによる差異についてKruskal-Wallis検定を行った結果、６つの変数においてコース間に統計的に有意な差は見られなかった。

２年生及び各コースによるq4_1とq4_2、q5_1とq5_2、q14_1とq14_2の時系列変化についてFriedman検定を行った結果、２年生では、q4_1とq4_2（p＝.011）、q5_1とq5_2（p＝.003）、q14_1とq14_2（p＝.020）において、ソーシャルワークコースでは、q4_1とq4_2（p＝.034）、q5_1とq5_2（p＝.008）において、統計的に有意な変化が見られた。心理学･カウンセリングコースでは、統計的に有意な変化が見られなかった。

表Ⅲ－3　令和２年度の多職種連携の視点に関する項目の分析結果

	q4_1									q4_2									
	mean	s.d.	IQR	0%	25%	50%	75%	100%	Shapiro-Wilk normality test	mean	s.d.	IQR	0%	25%	50%	75%	100%	Shapiro-Wilk normality test	Friedman 検定
２年生（n＝15）	4.27	0.80	1.00	3.00	4.00	4.00	5.00	5.00	.002	5.07	0.59	0.00	4.00	5.00	5.00	5.00	6.00	.001	.011
ソーシャルワークコース（n＝11）	4.18	0.87	1.50	3.00	3.50	4.00	5.00	5.00	―	5.09	0.70	0.50	4.00	5.00	5.00	5.50	6.00	―	.034
心理学・カウンセリングコース（n＝４）	4.50	0.58	1.00	4.00	4.00	4.50	5.00	5.00	―	5.00	0.00	0.00	5.00	5.00	5.00	5.00	5.00	―	n.s.
Kruskal-Wallis test						n.s.									n.s.				
	q5_1									q5_2									
	mean	s.d.	IQR	0%	25%	50%	75%	100%	Shapiro-Wilk normality test	mean	s.d.	IQR	0%	25%	50%	75%	100%	Shapiro-Wilk normality test	Friedman 検定
２年生（n＝15）	4.67	0.49	1.00	4.00	4.00	5.00	5.00	5.00	p<.001	5.27	0.59	1.00	4.00	5.00	5.00	6.00	6.00	.001	.003
ソーシャルワークコース（n＝11）	4.64	0.50	1.00	4.00	4.00	5.00	5.00	5.00	―	5.27	0.65	1.00	4.00	5.00	5.00	6.00	6.00	―	.008
心理学・カウンセリングコース（n＝４）	4.75	0.50	0.25	4.00	4.75	5.00	5.00	5.00	―	5.25	0.50	0.25	5.00	5.00	5.00	5.25	6.00	―	n.s.
Kruskal-Wallis test						n.s.									n.s.				
	q14_1									q14_2									
	mean	s.d.	IQR	0%	25%	50%	75%	100%	Shapiro-Wilk normality test	mean	s.d.	IQR	0%	25%	50%	75%	100%	Shapiro-Wilk normality test	Friedman 検定
２年生（n＝15）	4.47	0.74	1.00	3.00	4.00	4.00	5.00	6.00	.025	5.20	0.94	1.00	3.00	5.00	5.00	6.00	6.00	.004	.020
ソーシャルワークコース（n＝11）	4.55	0.82	1.00	3.00	4.00	5.00	5.00	6.00	―	5.09	1.04	1.50	3.00	4.50	5.00	6.00	6.00	―	n.s.
心理学・カウンセリングコース（n＝４）	4.25	0.50	0.25	4.00	4.00	4.00	4.25	5.00	―	5.50	0.58	1.00	5.00	5.00	5.50	6.00	6.00	―	n.s.
Kruskal-Wallis test						n.s.									n.s.				

（４）令和２年度の社会資源の活用に関する項目

q6_1、q6_2、q7_1、q7_2についてShapiro-Wilk正規性の検定を行った結果、q7_1以外のすべての項目の正規性が棄却されたため、ノンパラメトリック検定を行った（表Ⅲ－４）。次に、q6_1、q6_2、q7_1、q7_2のコースによる差異についてKruskal-Wallis検定を行った結果、４つの変数においてコース間に統計的に有意な差は見られなかった。

２年生及び各コースによるq6_1とq6_2、q7_1とq7_2の時系列変化についてFriedman検定を行った結果、２年生では、q6_1とq6_2（p＝.007）において、ソーシャルワークコースでは、q6_1とq6_2（p＝.034）において、統計的に有意なプラスの変化が見られ、心理学・カウンセリングコースでは、q6_1とq6_2において統計的に有意な変化が見られなかった。また、q7_1とq7_2は、２年生及び各コースにおいて統計的に有意な変化が見られなかった。

表Ⅲ-4　令和2年度の社会資源の活用に関する項目の分析結果

	q6_1									q6_2									
	mean	s.d.	IQR	0%	25%	50%	75%	100%	Shapiro-Wilk normality test	mean	s.d.	IQR	0%	25%	50%	75%	100%	Shapiro-Wilk normality test	Friedman検定
2年生（n=15）	4.07	0.80	1.50	3.00	3.50	4.00	5.00	5.00	.006	4.80	0.56	0.50	4.00	4.50	5.00	5.00	6.00	p<.001	.007
ソーシャルワークコース（n=11）	4.18	0.87	1.50	3.00	3.50	4.00	5.00	5.00	—	4.91	0.54	0.00	4.00	5.00	5.00	5.00	6.00	—	.034
心理学・カウンセリングコース（n=4）	3.75	0.50	0.25	3.00	3.75	4.00	4.00	4.00	—	4.50	0.58	1.00	4.00	4.00	4.50	5.00	5.00	—	n.s.
Kruskal-Wallis test						n.s.									n.s.				
	q7_1									q7_2									
	mean	s.d.	IQR	0%	25%	50%	75%	100%	Shapiro-Wilk normality test	mean	s.d.	IQR	0%	25%	50%	75%	100%	Shapiro-Wilk normality test	Friedman検定
2年生（n=15）	4.27	0.88	1.00	3.00	4.00	4.00	5.00	6.00	n.s.	4.33	0.98	1.00	2.00	4.00	5.00	5.00	5.00	p<.001	n.s.
ソーシャルワークコース（n=11）	4.45	0.82	1.00	3.00	4.00	4.00	5.00	6.00	—	4.27	1.01	1.00	2.00	4.00	5.00	5.00	5.00	—	n.s.
心理学・カウンセリングコース（n=4）	3.75	0.96	1.25	3.00	3.00	3.50	4.25	5.00	—	4.50	1.00	0.50	3.00	4.50	5.00	5.00	5.00	—	n.s.
Kruskal-Wallis test						n.s.									n.s.				

（5）令和2年度のシステムモデルに基づいた検討に関する項目

q8_1、q8_2、q9_1、q9_2、q10_1、q10_2についてShapiro-Wilk正規性の検定を行った結果、すべての項目の正規性が棄却されたため、ノンパラメトリック検定を行った（表Ⅲ-5）。次に、q8_1、q8_2、q9_1、q9_2、q10_1、q10_2のコースによる差異についてKruskal-Wallis検定を行った結果、6つの変数においてコース間に統計的に有意な差は見られなかった。

2年生及び各コースによるq8_1とq8_2、q9_1とq9_2、q10_1とq10_2の時系列変化についてFriedman検定を行った結果、2年生では、q8_1とq8_2（p=.008）、q9_1とq9_2（p=.020）、q10_1とq10_2（p＜.001）において、ソーシャルワークコースでは、q8_1とq8_2（p=.025）、q10_1とq10_2（p=.005）において、心理学・カウンセリングコースでは、q10_1とq10_2（p=.046）において統計的に有意なプラスの変化が見られた。

表Ⅲ－５　令和２年度のシステムモデルに基づいた検討に関する項目の分析結果

	q8_1									q8_2									
	mean	s.d.	IQR	0%	25%	50%	75%	100%	Shapiro-Wilk normality test	mean	s.d.	IQR	0%	25%	50%	75%	100%	Shapiro-Wilk normality test	Friedman 検定
２年生（n＝15）	4.47	0.52	1.00	4.00	4.00	4.00	5.00	5.00	p<.001	4.93	0.59	0.00	4.00	5.00	5.00	5.00	6.00	.001	.008
ソーシャルワークコース（n＝11）	4.55	0.52	1.00	4.00	4.00	5.00	5.00	5.00	―	5.00	0.63	0.00	4.00	5.00	5.00	5.00	6.00	―	.025
心理学・カウンセリングコース（n＝４）	4.25	0.50	0.25	4.00	4.00	4.00	4.25	5.00	―	4.75	0.50	0.25	4.00	4.75	5.00	5.00	5.00	―	n.s.
Kruskal-Wallis test						n.s.									n.s.				
	q9_1									q9_2									
	mean	s.d.	IQR	0%	25%	50%	75%	100%	Shapiro-Wilk normality test	mean	s.d.	IQR	0%	25%	50%	75%	100%	Shapiro-Wilk normality test	Friedman 検定
２年生（n＝15）	3.87	0.92	1.50	2.00	3.00	4.00	4.50	5.00	.0498	4.47	0.74	1.00	3.00	4.00	5.00	5.00	5.00	p<.001	.020
ソーシャルワークコース（n＝11）	3.91	1.04	2.00	2.00	3.00	4.00	5.00	5.00	―	4.45	0.69	1.00	3.00	4.00	5.00	5.00	5.00	―	n.s.
心理学・カウンセリングコース（n＝４）	3.75	0.50	0.25	3.00	3.75	4.00	4.00	4.00	―	4.50	1.00	0.50	3.00	4.50	5.00	5.00	5.00	―	n.s.
Kruskal-Wallis test						n.s.									n.s.				
	q10_1									q10_2									
	mean	s.d.	IQR	0%	25%	50%	75%	100%	Shapiro-Wilk normality test	mean	s.d.	IQR	0%	25%	50%	75%	100%	Shapiro-Wilk normality test	Friedman 検定
２年生（n＝15）	3.93	0.59	0.00	3.00	4.00	4.00	4.00	5.00	.001	4.87	0.52	0.00	4.00	5.00	5.00	5.00	6.00	p<.001	p<.001
ソーシャルワークコース（n＝11）	4.00	0.63	0.00	3.00	4.00	4.00	4.00	5.00	―	4.82	0.40	0.00	4.00	5.00	5.00	5.00	5.00	―	.005
心理学・カウンセリングコース（n＝４）	3.75	0.50	0.25	3.00	3.75	4.00	4.00	4.00	―	5.00	0.82	0.50	4.00	4.75	5.00	5.25	6.00	―	.046
Kruskal-Wallis test						n.s.									n.s.				

（６）令和２年度の理論に基づいた検討に関する項目

q11_1、q11_2、q12_1、q12_2、q13_1、q13_2についてShapiro-Wilk正規性の検定を行った結果、q13_1以外のすべての項目の正規性が棄却されたため、ノンパラメトリック検定を行った（表Ⅲ－６）。次に、q11_1、q11_2、q12_1、q12_2、q13_1、q13_2のコースによる差異についてKruskal-Wallis検定を行った結果、６つの変数においてコース間に統計的に有意な差は見られなかった。

２年生及び各コースによるq11_1とq11_2、q12_1とq12_2、q13_1とq13_2の時系列変化についてFriedman検定を行った結果、２年生では、q11_1とq11_2（p＝.035）、q13_1とq13_2（p＝.020）において、心理学・カウンセリングコースでは、q11_1とq11_2（p＝.046）において統計的に有意なプラスの変化が見られ、ソーシャルワークコースでは、q11_1とq11_2において統計的に有意な変化は見られなかった。また、q12_1とq12_2については、２年生及び各コースにおいて統計的に有意な変化は見られなかった。

表Ⅲ－6　令和２年度の理論に基づいた検討に関する項目の分析結果

	q11_1									q11_2									
	mean	s.d.	IQR	0%	25%	50%	75%	100%	Shapiro-Wilk normality test	mean	s.d.	IQR	0%	25%	50%	75%	100%	Shapiro-Wilk normality test	Friedman検定
２年生（n＝15）	3.87	0.92	1.50	2.00	3.00	4.00	4.50	5.00	.0498	4.33	0.82	0.50	3.00	4.00	4.00	4.50	6.00	p<.001	.035
ソーシャルワークコース（n＝11）	4.09	0.94	1.00	2.00	4.00	4.00	5.00	5.00	—	4.36	0.92	0.50	3.00	4.00	4.00	4.50	6.00	—	n.s.
心理学・カウンセリングコース（n＝４）	3.25	0.50	0.25	3.00	3.00	3.00	3.25	4.00	—	4.25	0.50	0.25	4.00	4.00	4.00	4.25	5.00	—	.046
Kruskal-Wallis test						n.s.									n.s.				
	q12_1									q12_2									
	mean	s.d.	IQR	0%	25%	50%	75%	100%	Shapiro-Wilk normality test	mean	s.d.	IQR	0%	25%	50%	75%	100%	Shapiro-Wilk normality test	Friedman検定
２年生（n＝15）	4.13	0.74	1.00	3.00	4.00	4.00	5.00	5.00	.006	4.53	0.64	1.00	3.00	4.00	5.00	5.00	5.00	p<.001	n.s.
ソーシャルワークコース（n＝11）	4.18	0.75	1.00	3.00	4.00	4.00	5.00	5.00	—	4.64	0.50	1.00	4.00	4.00	5.00	5.00	5.00	—	n.s.
心理学・カウンセリングコース（n＝４）	4.00	0.82	0.50	3.00	3.75	4.00	4.25	5.00	—	4.25	0.96	1.25	3.00	3.75	4.50	5.00	5.00	—	n.s.
Kruskal-Wallis test						n.s.									n.s.				
	q13_1									q13_2									
	mean	s.d.	IQR	0%	25%	50%	75%	100%	Shapiro-Wilk normality test	mean	s.d.	IQR	0%	25%	50%	75%	100%	Shapiro-Wilk normality test	Friedman検定
２年生（n＝15）	4.40	0.99	1.00	3.00	4.00	4.00	5.00	6.00	n.s.	4.87	0.83	0.50	3.00	4.50	5.00	5.00	6.00	.024	.020
ソーシャルワークコース（n＝11）	4.55	1.04	1.00	3.00	4.00	5.00	5.00	6.00	—	5.00	0.77	1.00	4.00	4.50	5.00	5.50	6.00	—	n.s.
心理学・カウンセリングコース（n＝４）	4.00	0.82	0.50	3.00	3.75	4.00	4.25	5.00	—	4.50	1.00	0.50	3.00	4.50	5.00	5.00	5.00	—	n.s.
Kruskal-Wallis test						n.s.									n.s.				

２．令和３年度の自己評価項目における記述統計量及び Friedman 検定、Kruskal-Wallis 検定の分析結果

（１）令和３年度のワークショップへの意欲に関する項目

q1_1、q1_2についてShapiro-Wilk正規性の検定を行った結果、q1_1の項目の正規性が棄却されたため、ノンパラメトリック検定を行った（表Ⅲ－７）。次に、q1_1、q1_2のコースによる差異についてKruskal-Wallis検定を行った結果、２つの変数においてコース間に統計的に有意な差は見られなかった。

また、２年生及び各コースによるq1_1とq1_2の時系列変化についてFriedman検定を行った結果、２年生及び各コースにおいて統計的に有意な変化が見られなかった。

表Ⅲ－７　令和３年度のワークショップへの意欲に関する項目の分析結果

	q1_1									q1_2									
	mean	s.d.	IQR	0%	25%	50%	75%	100%	Shapiro-Wilk normality test	mean	s.d.	IQR	0%	25%	50%	75%	100%	Shapiro-Wilk normality test	Friedman 検定
２年生（n＝19）	5.11	0.57	0.00	4.00	5.00	5.00	5.00	6.00	p<.001	5.16	0.60	0.50	4.00	5.00	5.00	5.50	6.00	n.s.	n.s.
ソーシャルワークコース（n＝13）	5.08	0.64	0.00	4.00	5.00	5.00	5.00	6.00	—	5.15	0.55	0.00	4.00	5.00	5.00	5.00	6.00	—	n.s.
心理学・カウンセリングコース（n＝６）	5.17	0.41	0.00	5.00	5.00	5.00	5.00	6.00	—	5.17	0.75	0.75	4.00	5.00	5.00	5.75	6.00	—	n.s.
Kruskal-Wallis test						n.s.									n.s.				

（２）令和３年度の多職種連携における専門職の役割への理解に関する項目

q2_1、q2_2、q3_1、q3_2についてShapiro-Wilk正規性の検定を行った結果、q2_2、q3_2において正規性が棄却されたため、ノンパラメトリック検定を行った（表Ⅲ－８）。次に、q2_1、q2_2、q3_1、q3_2のコースによる差異についてKruskal-Wallis検定を行った結果、４つの変数においてコース間に統計的に有意な差は見られなかった。

２年生及び各コースによるq2_1とq2_2、q3_1とq3_2の時系列変化についてFriedman検定を行った結果、２年生及び各コースにおいて統計的に有意な変化が見られなかった。

表Ⅲ－８　令和３年度の多職種連携における専門職の役割への理解に関する項目の分析結果

	q2_1									q2_2									
	mean	s.d.	IQR	0%	25%	50%	75%	100%	Shapiro-Wilk normality test	mean	s.d.	IQR	0%	25%	50%	75%	100%	Shapiro-Wilk normality test	Friedman 検定
２年生（n＝19）	4.37	0.68	1.00	3.00	4.00	4.00	5.00	5.00	n.s.	4.42	0.84	1.00	3.00	4.00	4.00	5.00	6.00	.006	n.s.
ソーシャルワークコース（n＝13）	4.46	0.66	1.00	3.00	4.00	5.00	5.00	5.00	—	4.38	0.87	1.00	3.00	4.00	4.00	5.00	6.00	—	n.s.
心理学・カウンセリングコース（n＝６）	4.17	0.75	0.75	3.00	4.00	4.00	4.75	5.00	—	4.50	0.84	0.75	4.00	4.00	4.00	4.75	6.00	—	n.s.
Kruskal-Wallis test						n.s.									n.s.				
	q3_1									q3_2									
	mean	s.d.	IQR	0%	25%	50%	75%	100%	Shapiro-Wilk normality test	mean	s.d.	IQR	0%	25%	50%	75%	100%	Shapiro-Wilk normality test	Friedman 検定
２年生（n＝19）	4.53	0.77	1.00	3.00	4.00	4.00	5.00	6.00	n.s.	4.79	0.79	1.00	3.00	4.00	5.00	5.00	6.00	.004	n.s.
ソーシャルワークコース（n＝13）	4.62	0.77	1.00	4.00	4.00	4.00	5.00	6.00	—	4.92	0.86	0.00	3.00	5.00	5.00	5.00	6.00	—	n.s.
心理学・カウンセリングコース（n＝６）	4.33	0.82	1.00	3.00	4.00	4.50	5.00	5.00	—	4.50	0.55	1.00	4.00	4.00	4.50	5.00	5.00	—	n.s.
Kruskal-Wallis test						n.s.									n.s.				

（３）令和３年度の多職種連携の視点に関する項目

q4_1、q4_2、q5_1、q5_2、q14_1、q14_2についてShapiro-Wilk正規性の検定を行った結果、q5_1、q5_2、q14_2の項目の正規性が棄却されたため、ノンパラメトリック検定を行った（表Ⅲ－９）。次に、q4_1、q4_2、q5_1、q5_2、q14_1、q14_2のコースによる差異についてKruskal-

Wallis検定を行った結果、６つの変数においてコース間に統計的に有意な差は見られなかった。

２年生及び各コースによるq4_1とq4_2、q5_1とq5_2、q14_1とq14_2の時系列変化についてFriedman検定を行った結果、２年生では、q4_1とq4_2（p＝.007）、q14_1とq14_2（p＝.008）において、心理学･カウンセリングコースでは、q4_1とq4_2（p＝.025）、q14_1とq14_2（p＝.025）において、統計的に有意なプラスの変化が見られ、ソーシャルワークコースでは、統計的に有意な変化が見られなかった。また、q5_1とq5_2については、２年生及び各コースにおいて統計的に有意な変化が見られなかった。

表Ⅲ－９　令和３年度の多職種連携の視点に関する項目の分析結果

	q4_1									q4_2									
	mean	s.d.	IQR	0%	25%	50%	75%	100%	Shapiro-Wilk normality test	mean	s.d.	IQR	0%	25%	50%	75%	100%	Shapiro-Wilk normality test	Friedman検定
２年生（n＝19）	3.84	0.76	0.50	2.00	3.50	4.00	4.00	5.00	n.s.	4.37	0.83	1.00	3.00	4.00	4.00	5.00	6.00	n.s.	.007
ソーシャルワークコース（n＝13）	4.00	0.58	0.00	3.00	4.00	4.00	4.00	5.00	—	4.31	0.75	1.00	3.00	4.00	4.00	5.00	6.00	—	n.s.
心理学・カウンセリングコース（n＝６）	3.50	1.05	1.00	2.00	3.00	3.50	4.00	5.00	—	4.50	1.05	1.00	3.00	4.00	4.50	5.00	6.00	—	.025
Kruskal-Wallis test						n.s.									n.s.				
	q5_1									q5_2									
	mean	s.d.	IQR	0%	25%	50%	75%	100%	Shapiro-Wilk normality test	mean	s.d.	IQR	0%	25%	50%	75%	100%	Shapiro-Wilk normality test	Friedman検定
２年生（n＝19）	4.32	0.75	0.50	3.00	4.00	4.00	4.50	6.00	p<.001	4.63	1.01	1.00	3.00	4.00	5.00	5.00	6.00	.006	n.s.
ソーシャルワークコース（n＝13）	4.54	0.78	1.00	4.00	4.00	4.00	5.00	6.00	—	4.69	1.11	1.00	3.00	4.00	5.00	5.00	6.00	—	n.s.
心理学・カウンセリングコース（n＝６）	3.83	0.41	0.00	3.00	4.00	4.00	4.00	4.00	—	4.50	0.84	0.75	3.00	4.25	5.00	5.00	5.00	—	n.s.
Kruskal-Wallis test						n.s.									n.s.				
	q14_1									q14_2									
	mean	s.d.	IQR	0%	25%	50%	75%	100%	Shapiro-Wilk normality test	mean	s.d.	IQR	0%	25%	50%	75%	100%	Shapiro-Wilk normality test	Friedman検定
２年生（n＝19）	3.89	0.88	1.50	2.00	3.00	4.00	4.50	5.00	n.s.	4.63	0.68	1.00	4.00	4.00	5.00	5.00	6.00	.004	.008
ソーシャルワークコース（n＝13）	4.15	0.80	1.00	3.00	4.00	4.00	5.00	5.00	—	4.69	0.75	1.00	4.00	4.00	5.00	5.00	6.00	—	n.s.
心理学・カウンセリングコース（n＝６）	3.33	0.82	1.00	2.00	3.00	3.50	4.00	4.00	—	4.50	0.55	1.00	4.00	4.00	4.50	5.00	5.00	—	.025
Kruskal-Wallis test						n.s.									n.s.				

（４）令和３年度の社会資源の活用に関する項目

q6_1、q6_2、q7_1、q7_2についてShapiro-Wilk正規性の検定を行った結果、q6_1以外のすべての項目の正規性が棄却されたため、ノンパラメトリック検定を行った（表Ⅲ－10）。次に、q6_1、q6_2、q7_1、q7_2のコースによる差異についてKruskal-Wallis検定を行った結果、４つの変数においてコース間に統計的に有意な差は見られなかった。

２年生及び各コースによるq6_1とq6_2、q7_1とq7_2の時系列変化についてFriedman検定を行った結果、２年生では、q6_1とq6_2（p＝.013）、q7_1とq7_2（p＝.0013）において、ソーシャ

ルワークコースでは、q6_1とq6_2（p＝.020)、q7_1とq7_2（p＝.020）において、心理学・カウンセリングコースでは、q7_1とq7_2（p＝.025）において、統計的に有意なプラスの変化が見られた。

表Ⅲ－10　令和３年度の社会資源の活用に関する項目の分析結果

	q6_1									q6_2									
	mean	s.d.	IQR	0%	25%	50%	75%	100%	Shapiro-Wilk normality test	mean	s.d.	IQR	0%	25%	50%	75%	100%	Shapiro-Wilk normality test	Friedman 検定
２年生（n＝19）	3.84	0.83	1.50	3.00	3.00	4.00	4.50	5.00	n.s.	4.47	0.51	1.00	4.00	4.00	4.00	5.00	5.00	p<.001	.013
ソーシャルワークコース（n＝13）	3.85	0.90	2.00	3.00	3.00	4.00	5.00	5.00	―	4.62	0.51	1.00	4.00	4.00	5.00	5.00	5.00	―	.020
心理学・カウンセリングコース（n＝６）	3.83	0.75	0.75	3.00	3.25	4.00	4.00	5.00	―	4.17	0.41	0.00	4.00	4.00	4.00	4.00	5.00	―	n.s.
Kruskal-Wallis test						n.s.									n.s.				
	q7_1									q7_2									
	mean	s.d.	IQR	0%	25%	50%	75%	100%	Shapiro-Wilk normality test	mean	s.d.	IQR	0%	25%	50%	75%	100%	Shapiro-Wilk normality test	Friedman 検定
２年生（n＝19）	3.58	0.61	1.00	3.00	3.00	4.00	4.00	5.00	.004	4.47	0.84	1.00	3.00	4.00	5.00	5.00	6.00	.006	.0013
ソーシャルワークコース（n＝13）	3.62	0.65	1.00	3.00	3.00	4.00	4.00	5.00	―	4.46	0.88	1.00	3.00	4.00	5.00	5.00	6.00	―	.020
心理学・カウンセリングコース（n＝６）	3.50	0.55	1.00	3.00	3.00	3.50	4.00	4.00	―	4.50	0.84	0.75	3.00	4.25	5.00	5.00	5.00	―	.025
Kruskal-Wallis test						n.s.									n.s.				

（５）令和３年度のシステムモデルに基づいた検討に関する項目

q8_1、q8_2、q9_1、q9_2、q10_1、q10_2についてShapiro-Wilk正規性の検定を行った結果、q8_1、q10_2の項目の正規性が棄却されたため、ノンパラメトリック検定を行った（表Ⅲ－11)。次に、q8_1、q8_2、q9_1、q9_2、q10_1、q10_2のコースによる差異についてKruskal-Wallis検定を行った結果、６つの変数においてコース間に統計的に有意な差は見られなかった。

２年生及び各コースによるq8_1とq8_2、q9_1とq9_2、q10_1とq10_2の時系列変化についてFriedman検定を行った結果、２年生では、q8_1とq8_2（p＝.003)、q10_1とq10_2（p＝.004）において、ソーシャルワークコースでは、q8_1とq8_2（p＝.007)、q9_1とq9_2（p＝.034)、q10_1とq10_2（p＝.011）において統計的に有意なプラスの変化が見られた。また、心理学・カウンセリングコースでは、すべての項目において統計的に有意な変化は見られなかった。

表Ⅲ-11　令和３年度のシステムモデルに基づいた検討に関する項目の分析結果

	q8_1									q8_2									
	mean	s.d.	IQR	0%	25%	50%	75%	100%	Shapiro-Wilk normality test	mean	s.d.	IQR	0%	25%	50%	75%	100%	Shapiro-Wilk normality test	Friedman 検定
２年生（n＝19）	4.00	0.75	1.00	3.00	3.50	4.00	4.50	5.00	p<.001	4.79	0.79	1.00	4.00	4.00	5.00	5.00	6.00	n.s.	.003
ソーシャルワークコース（n＝13）	3.92	0.86	2.00	3.00	3.00	4.00	5.00	5.00	—	4.77	0.83	1.00	4.00	4.00	5.00	5.00	6.00	—	.007
心理学・カウンセリングコース（n＝６）	4.17	0.41	0.00	4.00	4.00	4.00	4.00	5.00	—	4.83	0.75	0.75	4.00	4.25	5.00	5.00	6.00	—	n.s.
Kruskal-Wallis test						n.s.									n.s.				
	q9_1									q9_2									
	mean	s.d.	IQR	0%	25%	50%	75%	100%	Shapiro-Wilk normality test	mean	s.d.	IQR	0%	25%	50%	75%	100%	Shapiro-Wilk normality test	Friedman 検定
２年生（n＝19）	3.74	0.73	1.00	3.00	3.00	4.00	4.00	5.00	n.s.	4.11	0.74	1.00	3.00	4.00	4.00	5.00	5.00	n.s.	n.s.
ソーシャルワークコース（n＝13）	3.69	0.75	1.00	3.00	3.00	4.00	4.00	5.00	—	4.15	0.69	1.00	3.00	4.00	4.00	5.00	5.00	—	.034
心理学・カウンセリングコース（n＝６）	3.83	0.75	0.75	3.00	3.25	4.00	4.00	5.00	—	4.00	0.89	1.50	3.00	3.25	4.00	4.75	5.00	—	n.s.
Kruskal-Wallis test						n.s.									n.s.				
	q10_1									q10_2									
	mean	s.d.	IQR	0%	25%	50%	75%	100%	Shapiro-Wilk normality test	mean	s.d.	IQR	0%	25%	50%	75%	100%	Shapiro-Wilk normality test	Friedman 検定
２年生（n＝19）	3.74	0.87	1.00	2.00	3.00	4.00	4.00	5.00	n.s.	4.42	1.12	1.00	1.00	4.00	5.00	5.00	6.00	.0013	.004
ソーシャルワークコース（n＝13）	3.62	0.87	1.00	2.00	3.00	4.00	4.00	5.00	—	4.31	1.32	1.00	1.00	4.00	4.00	5.00	6.00	—	.011
心理学・カウンセリングコース（n＝６）	4.00	0.89	1.50	3.00	3.25	4.00	4.75	5.00	—	4.67	0.52	0.75	4.00	4.25	5.00	5.00	5.00	—	n.s.
Kruskal-Wallis test						n.s.									n.s.				

（６）令和３年度の理論に基づいた検討に関する項目

q11_1、q11_2、q12_1、q12_2、q13_1、q13_2についてShapiro-Wilk正規性の検定を行った結果、q12_1、q13_1、q13_2の項目の正規性が棄却されたため、ノンパラメトリック検定を行った（表Ⅲ－12）。次に、q11_1、q11_2、q12_1、q12_2、q13_1、q13_2のコースによる差異についてKruskal-Wallis検定を行った結果、６つの変数においてコース間に統計的に有意な差は見られなかった。

２年生及び各コースによるq11_1とq11_2、q12_1とq12_2、q13_1とq13_2の時系列変化についてFriedman検定を行った結果、２年生では、q11_1とq11_2（p＝.0013）、q12_1とq12_2（p＝.021）、q13_1とq13_2（p＝.035）において、ソーシャルワークコースでは、q11_1とq11_2（p＝.002）、q12_1とq12_2（p＝.034）において統計的に有意なプラスの変化が見られた。心理学・カウンセリングコースでは、すべての項目において統計的に有意な変化は見られなった。

表Ⅲ－12　令和３年度の理論に基づいた検討に関する項目の分析結果

	q11_1									q11_2									
	mean	s.d.	IQR	0%	25%	50%	75%	100%	Shapiro-Wilk normality test	mean	s.d.	IQR	0%	25%	50%	75%	100%	Shapiro-Wilk normality test	Friedman 検定
２年生（n＝19）	3.32	0.82	1.00	2.00	3.00	3.00	4.00	5.00	n.s.	4.00	0.75	1.00	3.00	3.50	4.00	4.50	5.00	n.s.	.0013
ソーシャルワークコース（n＝13）	3.31	0.63	1.00	2.00	3.00	3.00	4.00	4.00	―	4.15	0.69	1.00	3.00	4.00	4.00	5.00	5.00	―	.002
心理学・カウンセリングコース（n＝６）	3.33	1.21	1.75	2.00	2.25	3.50	4.00	5.00	―	3.67	0.82	1.00	3.00	3.00	3.50	4.00	5.00	―	n.s.
Kruskal-Wallis test						n.s.									n.s.				
	q12_1									q12_2									
	mean	s.d.	IQR	0%	25%	50%	75%	100%	Shapiro-Wilk normality test	mean	s.d.	IQR	0%	25%	50%	75%	100%	Shapiro-Wilk normality test	Friedman 検定
２年生（n＝19）	3.68	0.82	1.00	2.00	3.00	4.00	4.00	5.00	.0014	4.21	0.79	1.00	3.00	4.00	4.00	5.00	6.00	n.s.	.021
ソーシャルワークコース（n＝13）	3.69	0.95	1.00	2.00	3.00	4.00	4.00	5.00	―	4.23	0.83	1.00	3.00	4.00	4.00	5.00	6.00	―	.034
心理学・カウンセリングコース（n＝６）	3.67	0.52	0.75	3.00	3.25	4.00	4.00	4.00	―	4.17	0.75	0.75	3.00	4.00	4.00	4.75	5.00	―	n.s.
Kruskal-Wallis test						n.s.									n.s.				
	q13_1									q13_2									
	mean	s.d.	IQR	0%	25%	50%	75%	100%	Shapiro-Wilk normality test	mean	s.d.	IQR	0%	25%	50%	75%	100%	Shapiro-Wilk normality test	Friedman 検定
２年生（n＝19）	4.00	0.82	0.50	2.00	4.00	4.00	4.50	5.00	p<.001	4.47	0.61	1.00	3.00	4.00	5.00	5.00	5.00	.0014	.035
ソーシャルワークコース（n＝13）	3.92	0.95	2.00	2.00	3.00	4.00	5.00	5.00	―	4.38	0.65	1.00	3.00	4.00	4.00	5.00	5.00	―	n.s.
心理学・カウンセリングコース（n＝６）	4.17	0.41	0.00	4.00	4.00	4.00	4.00	5.00	―	4.67	0.52	0.75	4.00	4.25	5.00	5.00	5.00	―	n.s.
Kruskal-Wallis test						n.s.									n.s.				

Ⅳ．考察

本研究では、これまでの研究結果を踏まえて、令和２年度及び令和３年度における「地域包括支援実習」でのオンラインによるワークショップをする際に本学学生がソーシャルワークの視点からの学びがどの程度あったのか、そして、学生の所属するコースによってソーシャルワークの視点からの学びに違いがあるかを分析し、把握することを目的とした。

まず、ソーシャルワークの視点に関する学びの評価に対して学生の所属するコースによる差異について明らかにするために、横断分析としてKruskal-Wallis検定を行った結果、令和２年度及び令和３年度の全ての項目において統計的に有意な差は見られなかった。このことから、「地域包括支援実習」でのワークショップをする際にソーシャルワークの視点に関する学びの評価を横断的に見た場合、コースによる学びの評価の差異は見られないことが考えられた。つまり、「地域包括支援実習」のオンラインワークショップにおいては、どのコースに所属している学生であってもソーシャルワークの視点への理解や検討がどの程度できたかという学びへの評価に違いは見られないということが明らかとなった。

次に、オンラインによるワークショップでのソーシャルワークの視点の学びに関する自己評価

項目の時系列変化について明らかにするために、縦断分析としてFriedman検定による分析を行った結果、令和２年度では、２年生において、12項目（q1、q2、q3、q4、q5、q6、q8、q9、q10、q11、q13、q14）に統計的に有意な変化が見られ、１日目に比して２日目の得点が高い方に分布していることが明らかになった。また、ソーシャルワークコースについては、７項目（q1、q3、q4、q5、q6、q8、q10）に統計的に有意な変化が見られ、心理学・カウンセリングコースについては、３項目（q2、q10、q11）に統計的に有意な変化が見られ、１日目に比して２日目の得点が高い方に分布していることが明らかになった。そして、令和３年度では、２年生において、９項目（q4、q6、q7、q8、q10、q11、q12、q13、q14）に統計的に有意な変化が見られ、１日目に比して２日目の得点が高い方に分布していることが明らかになった。また、ソーシャルワークコースについては、７項目（q6、q7、q8、q9、q10、q11、q12）に統計的に有意な変化が見られ、心理学・カウンセリングコースについては、３項目（q4、q7、q14）に統計的に有意な変化が見られ、１日目に比して２日目の得点が高い方に分布していることが明らかになった。

これらのことから、本学２年生の学生は、オンラインであっても２日間のワークショップの回数を重ねることによって、ソーシャルワークの観点から事例検討に関する一定の教育効果が生じているということを推察することができた。特に、２年生においては、令和２年度と令和３年度との両年度において、７項目（q4、q6、q8、q10、q11、q13、q14）が統計的に有意なプラスの変化が見られていることから、年度の違いによらず五島セミナーにおいてオンラインによるワークショップを実施することによって、「医療の視点の検討」、「多職種での検討」、「フォーマルな社会資源の活用」、「ミクロレベルでの検討」、「マクロレベルでの検討」、「BPSモデルに基づいた検討」、「ストレングスモデルに基づいた検討」ができたという学生の自己評価項目の点数は１日目よりも２日目が大きくなることが推察された。

今回は、オンラインでのワークショップに関するソーシャルワークの視点からの評価であったが、コロナウイルス感染症への授業における対応も変化しつつあり、令和４（2022）年度の「地域包括支援実習」の一部である五島セミナーは、対面でのワークショップが実現したため、コースの違いによって対面授業の運営によるワークショップにおいて学生の学びの評価に違いが見られるか検討することを含め、今後も「地域包括支援実習」におけるソーシャルワークの視点からの成果について継続的にデータを収集、分析し、検証を重ねることが必要であることが課題であると最後に付記しておく。

引用文献

出雲幸奈・加藤小百合・上原裕規・他（2015）「第２回 長崎地域医療セミナー IN GOTO 地域包括ケアを知識から行動へ～ワークショップをきっかけに～」『日本プライマリ・ケア連合学会長崎県支部会第２回総会・学術集会（2015年２月14日）』

出雲幸奈・加藤小百合・上原裕規・他（2014）「第２回 長崎地域医療セミナー IN GOTO 地域包括ケアを知識から行動へ～ワークショップをきっかけに～」『第３回 全国シンポジウム 日本の国情・２次医療圏の実情を熟考して、理想的医師・医療者育成教育の展開を考える 2014（2014年11月15日）』

KANDA Yoshinobu（2013）Investigation of the freely available easy-to-use software ‘EZR’ for medical statistics, Bone Marrow Transplantation 48,pp.452-458.（http://www.nature.com/bmt/journal/v48/n3/pdf/

bmt2012244a.pdf).
本林秀一朗・山中聖奈・芦塚里奈・他（2020）「コロナ禍に開催したオンライン長崎地域医療セミナー in GOTO」第12回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会 学生セッション２
鍋内佳奈（2021）「長崎大学医学部と長崎純心大学人文学部地域包括支援学科との共修授業の成果に関する一研究―多職種連携教育における長崎純心大学生のソーシャルワークに係る学びに焦点を当てて―」令和２年度長崎純心大学人文学部地域包括支援学科卒業論文.
潮谷有二・梁瀬紗世・永田康浩・他（2020）「長崎大学医学部と長崎純心大学人文学部地域包括支援学科との共修授業の成果に関する研究―社会保障制度における地域包括ケアを支える医療と福祉人材の養成に関する取り組み（その５）―」『純心人文研究　第26号』, pp.1-22.
潮谷有二・永田康浩・奥村あすか・他（2017）「長崎大学医学部と長崎純心大学人文学部現代福祉学科との共修授業に関する授業評価尺度の開発―社会保障制度における地域包括ケアを支える医療と福祉人材の養成に関する取り組み（その３）」『純心人文研究 第23号』, pp.115-132.
戸口四郎・内田直子・林はるか・他（2015）「第２回 長崎地域医療セミナー IN GOTO 島を訪ね、多職種の卵たちと学んだ２泊３日～セミナー概要～」『日本プライマリ・ケア連合学会長崎県支部会第２回総会・学術集会（2015年２月14日）』
戸口四郎・内田直子・林はるか・他（2014）「第２回 長崎地域医療セミナー IN GOTO 島を訪ね、多職種の卵たちと学んだ２泊３日～セミナー概要～」『第３回 全国シンポジウム 日本の国情・２次医療圏の実情を熟考して、理想的医師・医療者育成教育の展開を考える 2014（2014年11月15日）』
梅本由衣・鈴田紘子・石丸阿佑美・他（2016）「第３回 長崎地域医療セミナー IN GOTO ～五島に来て、見て、気づいた多職種連携 広がる可能性～」『日本プライマリ・ケア連合学会長崎県支部会第３回総会・学術集会（2016年１月30日）』
梅本由衣・鈴田紘子・石丸阿佑美・他（2015）「第３回 長崎地域医療セミナー IN GOTO ～五島に来て、見て、気づいた多職種連携 広がる可能性～」『第４回 全国シンポジウム 日本の国情・２次医療圏の実情を熟考して、理想的医師・医療者育成教育の展開を考える 2015（2015年11月７日）』
山口慧世・駒走昌也・後藤麗奈・他（2019）「2018年度 長崎地域医療セミナー in GOTOの取り組み～医療と福祉、相互理解へ向けて～」『第12回日本プライマリ・ケア連合学会学術集会（2019年５月18日）』
吉田麻衣・潮谷有二・奥村あすか・他（2022）「医療と福祉の多職種連携教育を通したソーシャルワーク教育の成果に関する研究―社会保障制度における地域包括ケアを支える医療と福祉人材の養成に関する取り組み（その８）」『純心現代福祉研究 第26号』, pp.1-16.
吉田麻衣・潮谷有二・吉本知江子・他（2020）「離島地域をフィールドとする長崎純心大学の「地域包括支援実習」を履修した学生の自己評価についての考察―社会保障制度における地域包括ケアを支える医療と福祉人材の養成に関する取り組み（その７）―」『純心現代福祉研究 第24号』, pp.33-44.

【URL】
厚生労働省（2018）「ソーシャルワーク専門職である社会福祉士に求められる役割等について」
https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12601000-Seisakutoukatsukan-Sanjikanshitsu_Shakaihoshoutantou/0000199560.pdf（閲覧日：2022年９月25日）